川崎医療福祉学会誌　Vol. 23　No. 1　2013　37－48

原　著

高齢者の Spiritual well-being の概念の位置づけとその特徴

岡　本　宣　雄*1

要　　約

スピリチュアリティは，人が生きるうえでの価値や感情，認識，行為に影響を与える．本稿は，文献研究を通しスピリチュアルな存在として生きる高齢者像を把握するため，高齢者の Spiritual well-being を取り上げ，心理的な見地より考察する．また，Spiritual well-being の内容を類型化し構造的に捉え，この概念の特徴について検討する．

その結果，スピリチュアリティならびに Spiritual well-being に含まれる「超越性」の特質と超越性を有し生きる高齢者の特徴が明らかになった．また，この Spiritual well-being が表わす状態や行為は，「関係」（究極的な他者・他者や自然・自己）と「時間」（過去・現在・未来）で構成されることが明らかになった．加えて，高齢者のスピリチュアルなテーマと課題の検討から，高齢者の Spiritual well-being には，「意味への充足と応答」の内容が含まれることが示唆された．高齢者の Spiritual well-being は，意味探求の対象（究極的な他者・他者や自然・自己）との関係，人生という連続する時間のなかで，高齢者が超越的な存在として自身の生を肯定した状態として理解できる．また，この概念は，人生の窮状においても，それに意味付をし，価値ある存在としてその生を肯定できる，逆説的な生き方ができる人間の特性を含んでいる．

以上のことから，筆者は，Spiritual well-being を「Spiritual well-being は，自己，他者，自分より偉大な存在との結合により，連続した時間のなかで，人生の窮状においてもなお，意味が与えられ，自らの人生を肯定する人間の生の側面である」と定義付ける．本稿の Spiritual well-being をめぐる高齢者の実像に迫る考察と構造的理解は，生活課題に直面した高齢者の実像を把握するアセスメント票の開発に有益である．

1．緒論

社会福祉実践においては，利用者本人が「何ができるか」「何がしたいか」といった生産性や有用性と機能面の充足が前提とした議論や方策が取られてきた．すなわち，人の行為（doing）が重視されてきたのである．支援計画やケアプランの項目を見ても，高齢者の自立と自己実現の理念のもと，身体的な機能の維持・回復や社会的活動という生産的で能動的な側面が強調される傾向がある．しかし，筆者は，福祉従事者が人の行為や機能面を強調する前に，まず，人を存在（being）という観点から捉え，利用者が日常生活のなかで「どうありたいか」「価値あるものとは」「生きる意味とは」との実存的な問いをもち，生きる意味や価値を探求するスピリチュアルな存在であることを意識し，生活課題を抱える利用者自身がその生を肯定し生活を営んでいけるように支援していく必要があると考える．

スピリチュアリティは，人が生きるうえでの価値や感情，認識，行為に影響を与える[1]．スピリチュアリティの概念は，欧米において1970年代より，末期がん患者の終末期のホスピス，緩和ケアの全人的医療の臨床で発展した．そこでは，患者の痛みを全人的な痛み（total pain）と捉え，スピリチュアルな苦痛（spiritual pain）も指摘された[2]．それは人

*1 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科
（連絡先）岡本宣雄　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学
E-mail : nobuo@mw.kawasaki-m.ac.jp

が存在する意味や目的を喪失した時に感じる苦悩と理解された[3].

これらに付随しスピリチュアリティに関する研究は，スピリチュアルな苦痛の除去や緩和を目指すことに力点を置いたスピリチュアルケアの実践とその検証が盛んに行われてきた[4]．しかし，スピリチュアルニーズ（自己の存在の意味を問いかけ，超越的なものへの関心や欲求）が充足され，人生の肯定を促す，より良好な状態，日本語で「霊的安寧」等と表現されるSpiritual well-beingとはそもそも何なのか，その内容を表した研究や議論は少ないと考える．本研究は，各種の福祉サービスで対人援助が展開されているなか，高齢者分野における社会福祉実践において，スピリチュアルな側面を見据えた支援の意義を問い直すものであるといえる．

本研究は，文献研究により，近年，医療や福祉等のヘルスケアの領域でスピリチュアリティをめぐり多様な用語が用いられるなか，Spiritual well-beingの概念の位置付けを行う．そして，Spiritual well-beingの概念を医療や福祉分野での先行研究から検討する．これらを踏まえ，加齢をともない生活を送る高齢者理解をめぐる議論を取り上げ，スピリチュアルな存在として生きる高齢者像を示すため，高齢者のSpiritual well-beingの特徴を心理学的な見地から考察する．さらに，高齢者に関するSpiritual well-beingの先行研究の動向から，スピリチュアルニーズが充足され，安寧の状態にある高齢者のSpiritual well-beingの内容を構造的に捉えこの概念の特徴を明らかにする．

２．１　Spiritual well-beingの概念と研究

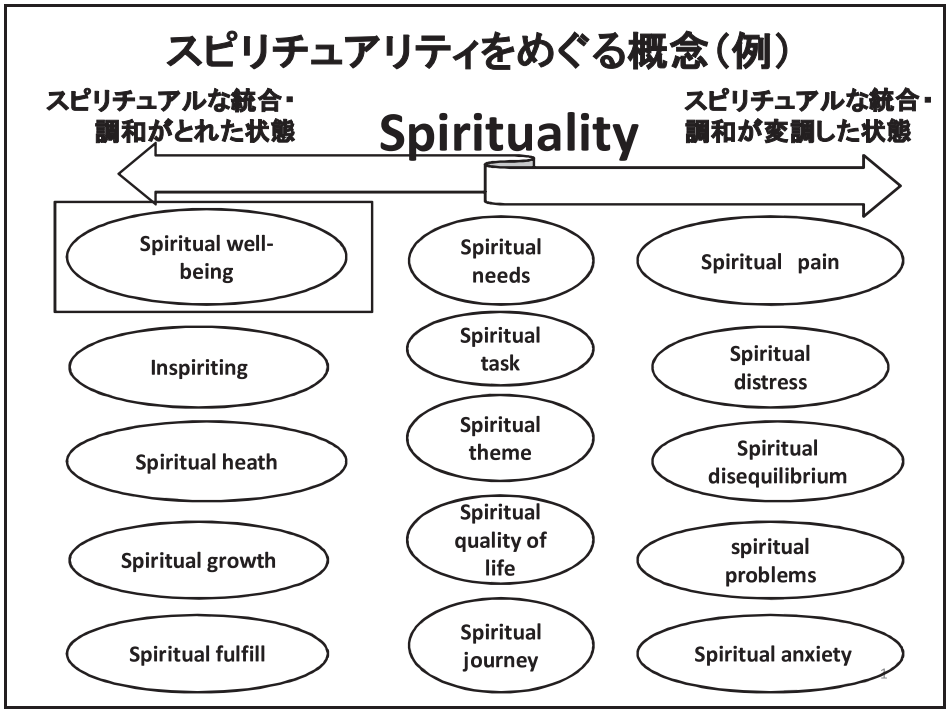
２．１．１　Spiritual well-beingの概念の位置づけ

スピリチュアリティに関連する用語は，多様な様相で表現され，スピリチュアリティを表す用語も多くの種類あり，医療・福祉の研究や実践において使用されている．そこで，複数にわたってあるスピリチュアリティに関連する概念を分類し，これらの全体からSpiritual well-beingの概念の位置づけを行う．

図１「スピリチュアリティをめぐる概念(例)」は，医療・福祉の分野で使用されるスピリチュアリティに関連する用語を文献研究から抽出し分類し，整理したものである[5].

スピリチュアリティの語句そのものは本来的には状態のよい，悪いという判断をともなう意味を持ち合わせた概念でなく，また，人に直接的に働きかけるものでない．スピリチュアリティは人に生来的に備わっている特質であり，生きることが脅かされる危機に直面し，生きる土台・意味・目的が失われた時，危機を生き抜く機能として覚醒すると考えられている[1]．その特質であるスピリチュアリティが，人生の経験のなかでさまざまな様相でもって表現されるのである．従って，図１の中央の列の用語，すなわち，

図１　スピリチュアリティをめぐる概念（例）



筆者作成

Spiritual needs（スピリチュアルニーズ），Spiritual task（スピリチュアルな仕事），Spiritual theme（スピリチュアルなテーマ），Spiritual quality of life（スピリチュアルな生活の質），Spiritual journey（スピリチュアルな旅）がこれにあたる．

そして，図１の特徴は，スピリチュアリティの概念を，生の意味の探求のため，その「拠りどころ」となる対象（例えば，超越する存在，他者，自己）との統合・調和[†1]のレベルの観点からスピリチュアリティの概念を配置していることである[5]．

左側の列にあるスピリチュアリティに関する概念は，人が意味探求の対象との関係とのなかで，統合・調和のとれた状態にある場合である．ここに配置された概念の用語，すなわち，Spiritual well-being（スピリチュアルな安寧），Inspiriting（内より湧き出るもの），Spiritual health（スピリチュアルな健康），Spiritual growth（スピリチュアルな成長），Spiritual fulfill（スピリチュアルな成熟），これらの概念は，内的な安寧や平安，創造的に生きるエネルギーに満ちた，生の成長と成熟を実感できるよりよい状態として表現されている．そして，Spiritual well-being は，この列に属する群に位置づけることができる[6]．

一方，右側の列にあるスピリチュアリティに関する概念は，人が意味探求の対象との関係とのなかで，統合・調和が変調した状態にある場合である．ここに配置された概念の用語，すなわち，Spiritual pain（スピリチュアルな痛み），Spiritual distress（スピリチュアルな苦悩），Spiritual disequilibrium（スピリチュアルな不均衡），Spiritual problems（スピリチュアルな問題），Spiritual anxiety（スピリチュアルな不安），これらの概念は，生活原理[†2]の崩壊，自己の存在意義に懐疑的になり，生きる意味や目的を喪失し，実存的な空虚感や罪責感等に捉えられた，それまで大切にしてきた確信が崩れた結果，生じる内なる心の混乱状態を表している[6]．

以上，スピリチュアリティの概念を統合・調和のレベルの観点から分類した．ここから，Spiritual well-being の概念は，自らの拠り所とする原理や価値とのつながり感のなかで，内的な安寧や平安に満たされ，その生に成熟と成長を実感できる，より良い状態と表すことができる．しかしながら，スピリチュアリティの概念は上述のように，必ずしも二極的に固定化されたものでなく，生活上の日々の経験なかで流動するものである．また，統合・調和の遂げられていない群に属するスピリチュアリティな概念は，否定的な，あるいは消極的な側面のみを示しているだけではない．Morris EH[7]は，スピリチュアルな苦悩は，Spiritual well-being と同様にその成長に貢献することができる特質であることを強調している．

２．２．Spiritual well-being の研究

２．２．１　世界保健機関（WHO）の健康の概念と Spiritual well-being

1998年の世界保健機関（WHO）執行理事会（総会の下部機関）は，WHO 憲章全体の見直し作業のなかで健康の定義の改正案を提起する．この改正案はいまだ可決に至っていないが，健康が単に疾病の有無で決められるのでなく，身体的，精神的，社会的，そして，あらたに，スピリチュアルな側面においても良好にある状態を表現する概念であることを提示する．すなわち，健康を表す人間観に Spiritual well-being を追加し強調する[8]．その後，WHO は健康概念の要素を成すスピリチュアリティに含まれる内容を明らかにするため，1998年から，スピリチュアリティの概念とそれを構成する下位概念について具体的な検討を行う．そして，各国で予備調査を実施し，スピリチュアリティを測定する「WHOQOL スピリチュアリティ，宗教，個人的信念に関する予備調査票」（WHOQOL Spirituality, Religious, Personal Belief Scale Pilot Module；WHOQOL SRPB）を開発する．この予備調査票の尺度は，スピリチュアリティの含まれる4領域と18の下位領域によって構成されている[8]．

この領域と項目は表１の通りである．

WHO が健康概念を説明するのに提示したスピリチュアリティに含まれる４領域「個人的な人間関係」「生きていく上での規範」「超越性」「宗教に対する信仰」，そして，これらに含まれる18下位領域の内容がスピリチュアルな統合・調和によりもたらされる事柄と理解するならば，これらの領域はスピリチュアルニーズが充足された，より良好な状態，すなわち，Spiritual well-being を実現するために必要な構成領域であると解釈することができる．

２．２．２　看護の分野における Spiritual well-being の研究

看護の分野では，Spiritual well-being の研究は，看断診断の領域で発展をみせている．看護診断は患者個人・家族・集団・地域社会に看護ケアを提供する際に看護師が行う判断を用語体系（ターミノロジー）にて整理され，介護介入と看護診断成果の基礎となる．新規採択・改定された看護診断は，健康と病におけるスピリチュアリティの重要性の認識と増加を述べている[9]．

NANDA 看護診断は，Spiritual well-being を霊的安寧促進準備状態（Readiness for enhanced Spiritual

表1 WHO の健康概念：スピリチュアリティに含まれる4領域と18下位領域[8)]

第1領域 個人的な人間関係 （Personal Relation）	1．親切，利己的でないこと(kindness to others／selflessness) 2．周囲の人を受容すること(acceptance of others) 3．許すこと(forgiveness)
第2領域 生きていく上での規範（Code to live by）	4．生きていく上での規範（code to live ） 5．信念や儀礼を行う自由(freedom to practice beliefs and rituals) 6．信仰（faith）
第3領域 超越性 （transcendence）	7．希望，楽観主義（hope／optimism） 8．畏敬の念（awe） 9．内的な強さ(inner strength) 10．人生を自分でコントロールすること(Control over your life) 11．心の平穏，安寧，調和（inner peace／Serenity／harmony） 12．人生の意味(meaning of life) 13．絶対的存在との連帯感(connectedness to a spiritual being or force) 14．統合性，一体感（wholeness／integration） 15．諦念，愛着（detachment／attachment） 16．死と死にゆくこと(death and dying) 17．無償の愛(divine love)
第4領域 宗教に対する信仰 (specific religious beliefs)	18．宗教に対する信仰（specific religious beliefs）

well-being）として説明している[9)]．本診断による分類は複数の領域と類型から成り立っており，Spiritual well-being の促進準備状態は，領域：生活原理[†2)]，類型：信念に属すものと位置づけられ，その定義は「人生の意味や目的を，自己，他者，美術，音楽，文学，自然，自分自身よりも大きな力とのつながりの中で経験し統合するパターンが，安寧のためには十分で，さらなる強化も可能な状態」[9)]とされる．

2．2．3 福祉の分野における Spiritual well-being の研究

社会福祉の分野では，Spiritual well-being の研究は，QOL 研究において発展をみせた．1960～70年代，アメリカ連邦政府が主導した社会指標運動（the social indicators movement）が契機となり，QOL と信仰や宗教的実践，個人的な信念や価値観等の宗教的（Religious）およびスピリチュアルな側面の関係性について研究が行われた．そして，それは QOL の測定の発展において，スピリチュアルな側面が人間の安寧（well-being）を支える必然的な要因とされ，その要因は Spiritual well-being と表現された．また，Spiritual well-being を捉え，評価する尺度の開発がなされている．Polution RF と Eellison CW は，Spiritual な側面を測定する尺度：SWBS（Spiritual Well-being Scale）を作成した．これは，２つの下位尺度，① Religious Well-being（垂直の次元：主に神との関係性）② Existential Well-being（水平の次元：人生の目的や満足度と関係する）から構成される[10)]．この尺度使用の分析結果，Spiritual well-being と自尊心，人生の意味や目的を見出す等の指標との間には統計学的に有意差が認められること，一方，孤独や抑うつ等とは相反関係（inverse relationships）があることが明らになった[10,11)]．

3．高齢者の Spiritual well-being の特徴とその課題

3．1 高齢者の特性の捉え直し－サクセスフル・エイジングの概念の進展－

高齢期に入ると，身体機能や知的・認知機能の低下が起こり，自身の喪失や認知症への不安等が起こってくる．また，定年退職や養育の役割が以前より減る等，社会的役割が低下し，ときに生きる意欲の低下等を引き起こし，うつ状態になることがある．さらに，配偶者等の身近な人との死別により，孤独感や生きがいの喪失をもたらすことがある．このように，加齢は，成熟以降の衰退過程として捉えられ，高齢者は，複合的，連鎖的な要因により複合喪失を体験すると言われている．こうした複合喪失により，自尊心や生きがいを実感できなくなり，人生やアイデンティティの危機となり，社会福祉の生活支援の場面において心理的，社会的な支援が必要となる場合がある[12)]．

しかし，近年，高齢者は虚弱であり，複合喪失を経験し，依存的な存在とみなされてきたが，高齢者の主体性を見直し，自らの力で高齢期のさまざまな変化や喪失に適切に対処しながら，充実した高齢期を過ごすサクセスフル・エイジング（successful aging）という考え方が提起されている．Rowe JW と Kahn RL[13] は．この考え方を発展させ，老化にともなう障害や歴年齢に対する一貫した偏見（ageism）を打破し，老化のポジティブな側面に焦点をあて，老化を肯定的に捉えようとする視点に関心が向けられるようになる[14]．

老化のポジティブな側面を重視する Rowe JW と Kahn RL が提唱したサクセスフル・エイジングは，活動理論（Activity theory）に依拠したものである．つまり，サクセスフル・エイジングは，壮年期までの社会活動をできるだけ維持することを幸福に老いるための条件とし，疾病や障害がなく，心身機能が良好であり，さらに生活への積極的関与があることを構成要素とした概念である．しかしながら，ここには，QOL を構成する主観的幸福感が入っていなかった．

この反省から，Crowther MR ら[15] は，Rowe JW と Kahn RL のモデルにスピリチュアリティの要素であるポジティブ・スピリチュアティ（positive spirituality）を加えるべきであると提言する．その根拠として，統計学的な結果を踏まえ，スピリチュアリティは，主観的幸福感の改善，憂鬱や苦悩の低減，罹患率の低下や平均余命の増加と関連すること等をあげている[14]．

以上のように，スピリチュアルの良好な状態，すなわち，Spiritual well-being は，サクセスフル・エイジングで表現される，老化のポジティブな側面と老いの肯定的な要素を含んだ概念である．しかし，これは単に，活動理論を基盤とする壮年期からの生産的活動に従事し，それを維持した延長上に実現するものでないことが理解できる．

３．２　高齢者における自己実現－ Maslow AH の至高体験から－

成人期を終えた人生の晩年期を生きる高齢者の特徴が，複合喪失と表現され，ネガティブな側面に焦点がおかれることが多い．そのようななか，心理学の研究から，理論的に，また実証的に，成人期以降に発達する人間の側面と新たな高齢者像が明らかにされている．

米国において，Maslow AH は人間的欲求の階層説を表明し考察している．Maslow AH は，人間的欲求はつねに相対的・階層的なかたちで低次のものから高次なものへと層をなし充足されると考える．すなわち，欠乏欲求（求める欲求）としての，生理的欲求，安全の欲求，所属と愛の欲求，承認の欲求へと，さらに，成長欲求（与える欲求）としての自己実現の欲求へと導かれると理解する．

この自己実現は，肯定的自己概念に基づいて自分自身の成長の可能性を信じて生きることともいえる．また，たとえ困難な状況に遭遇したとしても，それに直面し取り組むことにより，自己を拡大発展させ，独特の個性をもった存在に変容してゆくことが自己実現の過程ともいわれる[16]．このような精神の成熟は，人生の後半期に到達する状態であるとする見解も多くあり，高齢者の自己実現は，精神の成熟や生涯発達と関連づけて理解することができる．

さらに，Maslow AH は後に人間性心理学における中心概念のひとつに自己実現を達成している人の経験を至高体験（peak experience）と命名している．この状態は自己と状況とが一体化し，自己を意識しないほどに，自分を忘れて何かに打ち込んでいる状態を指している．そして，Maslow AH は人生における深い悟りや自然との出会い，あるいは，出産時の感動といった恍惚感を味わった人たちを対象とした調査を実施し，このような体験を一般的な特徴として明らにかし，人は至上の幸福をもった時に，時空の超越感，自我の超越に，さまざまな葛藤の解消，宗教的な啓示といった体験をもつことを表明する[17]．

高齢期は，ものの見方，時間の感じ方に大きな転換が要請される．Maslow AH が言い表した自己実現を達した者が抱く至高体験は，欠乏欲求の充足を目的とする生き方やこれまでの活動的な生活にともなう苦労や物質の所有することから人を解放し，成長欲求をともなう存在のあり方を重要なことと認める思考へと導いていく．そして，ここで体験される宇宙的時間の永遠性に関する超越の感覚は，人を自己の欲求を充足する目的的なものから，普遍的な価値あるものへの関心に志向させ，さらに自己犠牲的な利他的な生を価値あるものとする．

このように自己実現に達した高齢者が抱く至高体験のうち，時空の超越感や自我の超越，宇宙的時間の永遠性に関する感覚は，スピリチュアリティに含まれる超越性の特質に共通する[8]．そして，これらのスピリチュアリティに関するニーズの充足がもたらす内的な満足感と幸福感は，高齢者の Spiritual well-being であると理解できる．

３．３　高齢者における老年的超越の理論－ Tornstam L －

スピリチュアリティの良好な状態を表す Spiritual well-being に類似した概念に，ス

ウェーデンの Tornstam L が提唱する老年的超越（gerotranscendence）の理論がある．この概念はサクセスフル・エイジングのもう一つの観点として関心が寄せられている．Tornstam L は，老年的超越を高齢期における価値観や心理・行動の変化として理解し，老年的超越を「物質的な，合理的に思い描くものから宇宙的な，超越的なものへのメタパースペクティブ（meta-perspective）への移行である．それは通常には生活の満足が増し加わることにより起こる」[18]と説明している．このメタパースペクティブの移行は，現世の関わりが全てであった者が宇宙的な次元に価値を認める見方へと革新的に変化を遂げていくことを暗示している．この移行は3つの高齢期に関連する存在論的な3つの変化の次元，すなわち，①生命の宇宙的な次元（宇宙の一部である感覚）②自己の認識の次元（自己中心性の減少や自己超越等による内的一貫性）③社会と個人との相互関係の意識の次元（積極的な孤独等）を含んでいる．これらの老年的超越がもたらす3つの存在論の変化の各次元を要約すると次のようになる[19]．

①宇宙的な次元（宇宙との一体的な感覚）

高齢者が実際には，生きる空間の感覚は狭まっていくが，老年的超越に達する人は，自分がより大きい宇宙の一部であると感じ始める．全体的な視野でのこの移行は，宇宙とともにあり，その関係が継続するとの感覚が増し加わることより，人の差し迫る身体的な死との関連を減少させる．

②自己認識の次元

老年的超越は，生命の宇宙的な次元は生命と世界のより広い見方と関係し，自己認識の次元は人がいかに自分自身と自分を取り巻く世界を認識しているかに関係している．

③社会と個人との相互関係の次元

老年的超越は，他者との相互関係の感覚が増し加わることに関係している．老年的超越に達する人は，作り上げてきた家族や友人，他者とのつながりを背景に表面的な関心が減少しその意味を再評価する．このことは過去や未来とのつながりの意識を向上させ，人を他者とのより範囲の広い世界へと開き，他者と世界への応答を生み出す．同時にその開放性はより選択的な生き方へと導き，一人でいることを望ませる．

この老年的超越の理論が明示する物質的な合理的な捉え方から宇宙的な，超越的なものへのメタパースペクティブへの移行によりもたらされる感覚は，自然界の法則を超え，理性では説明がつかないような超自然的で非物質的な領域にありスピリチュアリティの良好な状態を表わす Spiritual well-being と共通している．

３．４　高齢期の発達課題の観点から－ Erikson JM の老年的超越の概念－

３．４．１　高齢期の発達課題－第8段階「統合対絶望」－

Erikson EH はライフサイクル論を提唱し，人間の全生涯にわたる各段階の対立命題（危機のテーマ）を提示している．Erikson EH らは，老年期を最後の8段階に位置づける．この時期の対立命題は「統合」対「絶望」である．老年期は，身体的な限界に加えて，有限な存在として個人的未来に対峙するという重荷を抱える．そして，「残された未来を生き抜く英知の感覚を統合し，現在生きている世代の中でうまく釣り合う位置に自分を置き，無限の歴史的連続の中で自分の場所を受け入れる，という課題に直面する」[20]．つまり，この統合によって，人生のやり直しがきかないとの絶望感に打ち勝つことにより，英知（wisdom）を見出すことができる．この「英知とは死そのものを目前にしての，人生そのものに対する超然とした関心である」[21]．一方，彼らは，この英知と対をなす不協和特性（antipathic counterpart）が侮蔑（disdain）であるとし，「これは，歳を重ねるごとに，ますます『御用済み』となり，『途方に暮れ』『寄るべもなくなる』という状態の中で抱く感情（そして他者もそのような状態にあると見ること）への一つの反応である」[22]と述べる．

３．４．２　高齢期の発達課題－第9段階「老年的超越」－

Erikson JM は，晩年この考え方を再考する．第8段階の高齢像は，長老として思慮が深くその役割を果たし，尊厳ある死に方を熟知する賢明な少数の人間として，人々から理解され選ばれた存在とされた時代に当てはまるものであったとする．ところが，今や高齢者人口は増加し，高齢者の存在が特別な存在ではなくなってきた社会状況の変化により，高齢者の役割は大きく変化を遂げ決して高齢者が少数の賢者と認めることができなくなった．そこで，Erikson JM は，年々増加する後期高齢期（80代後半～90歳代）を第９段階と名付けた．

そして，第9段階の課題を次のように述べている．第9段階は，むしろ各発達段階の失調要素（乳児期の同調要素「信頼」に対する「不信」，幼児期の同調要素「自律」に対する「恥・疑惑」のように）が優先順位に立つ時期である．ところが，そこでもし高齢者が「第９段階での人生経験に含まれる失調要素を甘受することができるのならば，老年的超越性（gerotranscendence）に向かう道への前進に成功する」[23]としている．

Erikson JM の第9段階の老年的超越は，先述した Tornstam L が提唱した老年的超越を引き継いだものであり，この段階の高齢者の発達課題をさらに発展的に考察したものである．Erikson JM は「老年的超越とは，メタ的な見方への移行，つまり物質的・合理的な視点からより神秘的（コスミック）・超越的な視点への移行である」[24] と説明する．そして，老年的超越に達している個人は，宇宙の精神と神秘的交信という新しい感情，時間と空間と生と死の再定義，そして自己の再定義を体験している．また，このような個人は，物質的な事柄への関心を減退させ，孤独な瞑想の必要性を増大させる経験をしている，と解説する[25]．

さらに，Erikson JM は，この老年的超越が活性化され，トランセンダンス（transcendance）（Erikson J の造語であり，この語のもつ優美さや躍動感を表現する）となって息づき始めた時，「このトランセンダンスは魂と身体に語りかけ，我々の世俗的な実存にまとわりつく失調的な側面……を乗り越える課題に『超越』を挑ませる」[26] という．すなわち，高齢期の第9段階を特徴付ける老年的超越は，高齢者が自己を超越するものとのつながり感のなかで，自らの生と死の意味の再定義を促し，有限な存在である人間がもつ失調的な側面に立ち向かう力となることを言い表す．

さらに，Erikson JM は，老年的トランセンダンスの域に達することは，時空を超えて，高みに上がること，凌ぐこと，まさること，限界を超えることである．それは人間の知識と経験を越えることを含み，身体と心と精神を隅々まで使うありとあらゆる活動へと我々を導いていく[26] と述べる．ここには，老年的超越が活性化されトランセンダンスに達した高齢者の特徴が叙述されている．つまり，このトランセンダンスの状態に達した高齢者は，時間と空間を超え，さらには自らの限界や知識や経験を超え，肉体と精神を合わせもつ有限なる存在でありながら，日常の生活や活動の場で導かれていくことを示している．

この老年的超越は，スピリチュアリティに共通するものであり[27]，高齢者のスピリチュアルな存在としての特徴を表現している．ここには神秘的・超越的な特質を有する人間理解があり，スピリチュアルな存在として超越的な視点から自らの存在意義とその生を捉え直し生きる，後期高齢者の Spiritual well-being の特徴を提示している[†3]．

4．高齢者の Spiritual well-being の内容を捉える研究の展開

4．1　高齢者とホワイトハウス会議（White House Conference on Aging）

Spiritual well-being の概念とその研究は，1971年の高齢者に関するホワイトハウス会議で Spiritual well-being 部門が設けられここにて初めて紹介された．本会議に先だち開催された Spiritual well-being に関する専門委員会のバッググランドペーパーのなかで，Moberg DO は，「Spiritual well-being は，人の内的な資源に付随し，特にその人の究極の関心事，基本的価値，人生における哲学，信念にかかわり，人間の行いを導き，超自然的で非物質的な領域である．ゆえに，たとえ，宗教的な組織に属さず，何らかの宗教的実践を行っていなくても，すべての人は Spiritual な存在である」（鶴若訳）と述べている[28,29]．

本会議は，高齢者を理解し支援の際，高齢者の Spiritual well-being の把握が重要であることを初めて公に提起しこの研究を発展させていった．本会議は，Spiritual well-being が本来的に人間に備わっている超自然的かつ非物質的な領域であり，人格を構成する核（core）として，人の根源的な関心や価値や哲学，信条に関連し，判断や行動を起こす特質があることを提示する．

4．2　高齢者に関する全米宗教間相互協力委員会（National Interfaith Coalition on Aging：NICA）

NICA は，1971年の高齢者に関するホワイトハウス会議で取り上げられた高齢者の Spiritual well-being をさらに専門的に議論するため1972年に組織された．本委員会は高齢者に関する国家評議会に属し，あらゆる信仰をもつ組織や個人で構成され，高齢者と Spiritual な側面とのかかわり合いを研究し，実践的なガイドラインを提供している．

NICA は Spiritual well-being を次のように定義する．「Spiritual well-being は，神，自己，コミュニティ，環境との関係性のなかでの人生の肯定であり，それらは全体性を育み，心から享受されるものである」（鶴若訳）[29,30]．NICA によれば，Spiritual well-being は，神，自己，コミュニティ，環境のなかでの「人生の肯定」であり，これは単に人生の一側面ではなく，むしろ人生全体に浸透し，意味を与え，分裂や孤立と対照的に全体性を指し示す．すなわち，身体的，心理的，社会的な健康と同等ではなく，むしろ，どのような否定的な状況にもかかわらず，人生に「Yes」と言うことができる，人生の肯定である．このことは，あえて現実を無視した楽観

主義ではなく，いかなる状況においても，神，自己，コミュニティ，環境のなかでの人生を肯定していくことが，Spiritual well-being のダイナミズムであると表現している[31]．

このNICAの定義は，Spiritual well-being が単に身体的な疾病がなく，心身の痛みや苦悩がない状態でなく，たとえ人生の窮状にあってもなお，その人がその出来事を受容し，それらに意味付けができ，尊厳ある価値ある存在ある者として，人生を肯定できる，人の特性であることを表している．

4．3 高齢者の Spiritual well-being の特徴－調和的な相互関連性の観点から－

Hungelmann J ら[4] は，病院，自宅住居，高齢者ハウジングの65歳以上の高齢者，31名を対象に150時間にわたり Spiritual well-being の特徴を明らかにする目的でインタビュー調査を行った．そしてそれらの内容をグランデッドセオリーの方法を用い分析した．その結果，29のカテゴリーを導き出した（表２）．そして，これらをカテゴリー類型化することにより，Spiritual well-being を表し得るすべての行為や特質が，「関係」（Relationship）と「時間」（Time）で構成され，この２つの元になるカテゴリー項目のもと，６つのコアカテゴリー「究極的な他者」「他者／自然」「自己」「過去」「現在」「未来」の項目に類型化できることを明らかにする（表２）．

さらに，これらの２つの元になるカテゴリーと６つのコアカテゴリーの関係性に着目し，これらを構造的に捉え分析した結果，すべてのカテゴリーの固有性を統合し，集約する２つの主要なテーマ「調和」（harmony）と「つながり」（connection）を抽出する．そして，Hungelmann J ら[4] は，Spiritual well-being は個人のうちで完結するものでなく，社会と関係し生きる本人，そして本人を取り巻く社会が変化・発展する動態的な過程（process）として理解している．それを構成する「時間」と「関係」という軸を据え，カテゴリー間の相互作用をもって捉えられる Spiritual well-being の特質を基礎的な社会過程（the basic social process）としての「調和的な相互関連性」（Harmonious Interconnectedness）という用語で説明している．

4．4 高齢者の Spiritual well-being の特徴－意味の探求の観点から－

McKinley E[32] は，高齢者のスピリチュアルなテーマと課題（spiritual themes and task of aging）について研究を行った．彼女は，65歳以上のナーシングホーム入居者24名に対し，スピリチュアルな側面へのインタビュー調査を行い，その内容をグラウンデッドセオリーの方法を用い分析した．その結果，高齢者のスピリチュアルなテーマとして，神，他者，宗教的な信念を含む「人生の究極的な意味」と「人生の意味への応答」を中心に据え，それらに関連する４つのテーマ（対となる概念），「自己充足感／脆弱さ」「最終的な意味に向けた賢明さ／暫定なるもの」「関係／孤独」「希望／恐れ」とそれぞれのテーマに応じた計６つの課題を提示した[32]（表3参照）．

すなわち，高齢者のスピリチュアルなテーマと課

表２ Spiritual well-being のコアカテゴリーと特性[4]

＜関係＞	＜時間＞
「究極的な他者」	**「過去」**
1．至高の存在者を信仰する	1．親の／他者の影響を認識する
2．生活の状況と結果に関連する神を信頼する	2．過去の社会文化的な結び付きを表現する
3．神の愛を表現する	3．フォーマルな信仰システムとのつながりを叙述する
4．祈りを通して神と会話する	4．過去の宗教的実践／儀式を叙述する
5．宗教的な実践に参加する	5．時間を超えた成長と変化を表現する
「他者／自然」	**「現在」**
1．他者との違いを受容する／黙って許す	1．可能性に向けて行動する
2．互いの愛と事柄を表現する	2．価値／実践の間で合致を表現する
3．相互の赦しを表現する	3．成長／変化に向けて開かれている
4．助けを受容し，助ける	4．共同参加の祈り／儀式に参加する
5．自然のよさが分かる	5．人生の状況で意味と目的を見出す
「自己」	**「未来」**
1．自己と生活の状況を受容する	1．ゴールを設定する
2．内なる自己を高く評価する	2．究極的な完成を希望する
3．自己決定を高く評価する	3．死後に希望をもつ
4．積極的な態度をもっている	4．人生における意味と目的を探求する
5．生活の満足を表現する	

表３　高齢者のスピリチュアルなテーマと課題[32)]

テーマ	課題
1. 人生の究極的な意味	究極的な意味をもたらせるものと一体感をもつ
2. 人生の意味への応答	応答するのに適した方法を見出すこと
3. 自己充足感 ／脆弱さ	障害，喪失を超えていくこと
4. 最終的な意味に向けた賢明さ／暫定なるもの	最終的な意味を探求すること
5. 関係／孤独	神や他者との親密さを見出すこと
6. 希望／恐れ	希望を見つけること

題に人生の意味とその探求が中心的な概念としてあり，Spiritual well-being は，意味探求のニーズが充足され，それぞれのテーマに応じた課題が達せられたところに実現するものと考えることができる．

５．結論

Spiritual well-being の概念は，統合・調和のレベルの観点から捉えることができる．すなわち，それは自己，他者，超越する存在との関係で統合・調和のとれた状態にある内的な安寧や平安である．

高齢者は疾病や障害等で慢性的な状況の現実を生き，喪失感や終末期での死に対処することのなかで，より悲観的な（negative）人生の出来事に直面する傾向がある．この現状のなか，サクセスフル・エイジングの考え方にあるように，社会福祉実践において老化のポジティブな側面に着目し，肯定的な要素を理解するSpiritual well-beingの視点は重要である．

本研究は，高齢者の Spiritual well-being の特性を理解するため，これを心理学的な見地から，特に，Maslow AH の自己実現に付随する至高体験，Tornstam L や Erikson JM の提唱する老年的超越の理論を通して考察した．その結果，以下のようなスピリチュアリティならびに Spiritual well-being の概念に含まれる「超越性」の特質と超越性を有し生きる高齢者の特徴が明らかになった．第一は，スピリチュアリティは超自然的で非物質的な領域である．自分が宇宙の一部である感覚は物質的・合理的な視点から神秘的・超越的な視点への移行をもたらす．第二は，人の究極な関心事，基本的価値，人生における哲学，信念にかかわり，判断と行動を導くものである．第三は，老年的超越は，スピリチュアリティの概念と共通性があり，老年的超越に達する個人は，宇宙の精神と神秘的交信という新しい感情のなかで，時間や空間，生と死，自己の再定義を体験する．これらの考察はスピリチュアルな存在として生きる高齢者の実像を理解するうえで重要である．

さらに本研究では，先行研究から高齢者の Spiritual well-being の特徴を示すため，その内容を類型化し，構造的に捉える試みを行った．その結果，Spiritual well-being を表わす状態や行為が，「関係」（究極的な他者・他者や自然・自己）と「時間」（過去・現在・未来）で構成されることが明らかになった．加えて，高齢者のスピリチュアルなテーマと課題に「人生の究極的な意味」「人生の意味への応答」があり，高齢者の Spiritual well-being には，「意味への充足と応答」の内容が含まれることが示唆された．

高齢者の Spiritual well-being は，意味探求の対象との関係と人生という連続する時間のなかで，高齢者が超越的な存在として自身の生を肯定した状態として理解できる．しかし，それは，単に身体的な疾病がなく，心身の痛みや苦悩がない状態ではない．また，現実を無視した単なる楽観主義でもない．人生の窮状においても，なおも人生での出来事を受容し，それに意味付をし，価値ある存在としてその生を肯定できる，逆説的な生き方ができる人間の特性を含んでいる．

以上のことから，筆者は，Spiritual well-being を次のように定義付ける．「Spiritual well-being は，自己，他者，自分より偉大な存在との結合により，連続した時間のなかで，人生の窮状においてもなお，意味が与えられ，自らの人生を肯定する人間の生の側面である」．

高齢者は，人生のステージで，有限な人間の生と人の能力の限界を経験するなか，高齢期が新しい意味と目的を探求するひとつのプロセスであり，スピリチュアルな成長（spiritual growth）に向けて導く入口（gateway）として積極的に評価されることが望まれる[33)]．従って，従来からのスピリチュアルな苦痛等の除去に力点が置かれるケアではなく，むしろスピリチュアリティを人の強み（strength）と捉え，これを強化する（empower）アプローチ

が望まれる。このことから高齢者に対し，Spiritual well-being の視点とそれを考慮した生活支援の在り方が必要である．その意味で，本稿における高齢者の Spiritual well-being をめぐる高齢者の実像に迫る考察と構造的理解は，生活課題に直面した高齢者の実像を把握し，生活上の解決すべき課題（ニーズ）を明らかにするアセスメントに有益であり，スピリチュアリティの項目を含めたアセスメント票の開発につながると考える。

本稿で展開した，高齢者の Spiritual well-being の考察は，スピリチュアルな存在として生きる高齢者の一般論的な理解であった．また，文献による検討の多くが外国文献を用いたものであり，かつこれらの文献も限定的なものであった．さらに，高齢者の Spiritual well-being の検討は具体的な内容よりも，その視点と構造的な提示にとどまった．これらは本稿の限界であるといえる。今後は，日本の事情や文化等を鑑み，かつ個別性が反映されるかたちで，高齢者の Spiritual well-being の特徴の内容を検討する文献研究と実証的研究が進行していくことが期待される．

本研究は，平成24年度川崎医療福祉大学の医療福祉研究費の補助金を受けたものである．感謝申し上げます。

注

†１）今村由香，河正子，萱間真美他は，欧米のスピリチュアリティに関する先行研究のレビューにより，スピリチュアリティ概念構造の検討を行い，スピリチュアリティの構成要素を，統合レベル（結びつき・関係性）と探求の方向性（超越的なもの・他者や環境事象・内的自己）で説明する．これに従い，図１の統合と調和を解釈すると，「統合」は，探求する方向性で示された対象との関係におけるつながり，結びつき，「調和」は統合に起因する心の平安，平穏，安寧の状態等と表すことができる[5]．

†２）NANDA インターナショナルは，生活原理（Life principles）を「真実である，または本質的な価値があるとみなされている行為や慣習や制度についての振る舞いや思考や行動の基本となる原理」[9] と説明する．

†３）スピリチュアリティはすべての人間に生来的に備わっている特質であり，超越性はスピリチュアリティを構成する主要な領域である[8]．従って，超越性はすべての高齢者が有していると考える．しかし，老年的超越は，人生の出来事の経験なかで個人的に獲得されるもので，この状態に達する者は限定的に理解されている[18, 26]．本稿では，老年的超越を Spiritual well-being の特徴の例として提示している．

文　　献

1）窪寺俊之：スピリチュアルケア概説．第1版，三輪書店，東京，38－41，2008.

2）淀川キリスト教病院ホスピス編：緩和ケアマニュアル　ターミナルケアマニュアル　改訂第4版．第4版，34，2001.

3）Saunders C：Spiritual pain. *Journal of palliative care*，**4**(3)，29－32，1988.

4）Hungelmann J, Rossi EK, Klassen L and Stollenwerk RM：Spiritual Well-being in Adults：Harmonious Interconnectedness. *Journal of Religion and Health*，**24**(2)，147－154，1985.

5）今村由香，河正子，萱間真美，水野道代，大塚麻揚，村田久行：終末期がん患者のスピリチュアリティ概念構造の検討．ターミナルケア，**12**(5)，425－434，2002.

6）Taylor EJ，江本愛子，江本新監訳：スピリチュアルケア　看護のための理論・研究・実践．第1版，医学書院，東京，6－8，2008.

7）Morris EH：A Spiritual Well-being Model：Use with Older Women who Experience Depression. *Issues in Mental Health Nursing*, **17**(5)，439－455，1996.

8）藤井美和，李政元，田崎美弥子，松田正己，中根允文：日本人のスピリチュアリティの表すもの：WHOQOL のスピリチュアリティ予備調査から．日本社会精神医学会雑誌，**14**(1)，3－17，2005.

9）T. ヘザー・ハートマン編集，日本看護診断学会監訳：NANDA －Ⅰ看護診断　定義と分類　2012－2014．第１版，医学書院，東京，457－458，2012.

10）Ellison CW：Spiritual well-being：Conceptualization and measurement. *Journal of Psychology and Theology*, **11**(4)，330－340，1983.

11）Fehring RJ, Brennan PF and Keller ML：Psychological and Spiritual Well-being in College Students. *Research in Nursing and Health*, **10**，391－398．1987.

12）社会福祉士養成講座編集委員会編：老人福祉論．第5版，中央法規，東京，24－25，2007.
13）Rowe JW and Kahn RL：Successful aging. *The Gerontologist*，**37**(4)，433－440，1997.
14）大内財義，秋山弘子編集代表：新老年学．第3版，東京大学出版会，東京，1619－1624．2010.
15）Crowther MR, Perker MW, Achenbaum WA, Larimore WL and Koenig HG：Rowe and Kahn's model of successful aging revisited : positive spirituality – forgotten factor. *The Gerontologist*，**42**(2)，613－620，2002.
16）藤永保監修：こころの問題事典．第1版，平凡社，東京，70，2006.
17）中島義明，安藤清志，子安増生他：心理学事典．第1版，有斐閣，東京，326－327，1999.
18）Tornstam L：Gerotanscendence reformulation of the disengagement theory. *Aging*，**1**(1)，55－63，1989.
19）Tornstam L：Gerotranscendence ：*A Developmental Theory of Positive Aging*. Springer PC，NY，48－77，2005.
20）Erikson EH, Erikson JM and Kivnick HQ, 朝長正徳，朝長梨枝子訳：老年期，第1版，みすず書房，東京，59，1990.
21）Erikson EH, Erikson JM and Kivnick HQ, 朝長正徳，朝長梨枝子訳：老年期，第1版，みすず書房，東京，37，1990.
22）Erikson EH, Erikson JM, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳：ライフサイクル, その完結（増補版）．第１版, みすず書房, 東京，79－80，2001.
23）Erikson EH, Erikson JM, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳：ライフサイクル, その完結（増補版）．第１版, みすず書房, 東京，164，2001.
24）Erikson EH, Erikson JM, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳：ライフサイクル, その完結（増補版）．第１版, みすず書房, 東京，181，2001.
25）Erikson EH, Erikson JM, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳：ライフサイクル, その完結（増補版）．第１版, みすず書房, 東京，182，2001.
26）Erikson EH, Erikson JM, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳：ライフサイクル, その完結（増補版）．第１版, みすず書房, 東京，187－188，2001.
27）小倉襄二，浅野仁編：新版老後保障を学ぶ人のために．第1版，世界思想社，285，2006.
28）Moberg DO：*Spiritual well-being : Background and Issues*. Washington, DC, White House Conference on Aging. 1971.
29）鶴若麻理：語り（ナラティヴ）からみる高齢者の生きがい．早稲田大学大学院，**49**，2003.
http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/309/3/Honbun-3369.pdf 2013年6月1日.
30）National Interfaith Coalition on Aging：Spiritual Well-being : A model ecumenical work, product. *NICA Inform*，**1**(4)，1975.
31）Thorson JA：*Perspectives on spiritual well-being and aging*, Springfield, Charles, C Thomas Publisher, Foreword 11－14，2000.
32）MacKinlay E：The spiritual dimension of caring applying a model for spiritual tasks of aging, In MacKinlay E, Ellor J and Pickard. S(ed), *Aging, spirituality and pastoral care*, NY, The Haworth Pastoral Press. 59－71，2001.
33）Ai A：Spiritual well-being, population aging, and a need for improving practice with the elderly : A psychosocial account. *Social Thought*，**19**(3)，1－21，2000.

（平成25年６月13日受理）

The Concept of Spiritual Well-being in the Elderly and Its Characteristics

Nobuo OKAMOTO

(Accepted Jun. 13, 2013)

Key words : spiritual well-being, elderly, successful aging, gerotranscendence, affirmation of life

Abstract

Spirituality affects a person's values, emotions, knowledge and actions as long as one lives. Using literature review, this paper takes up spiritual well-being and observes it from a psychological perspective in order to comprehend more fully the elderly who live with a spiritual presence. Aspects of spirituality are categorized and regarded structurally in order to identify the characteristics of this concept.

The results of this paper make known the special nature of "transcendence," which includes spiritual well-being and spirituality, and the special characteristics of the elderly who live with a sense of transcendence. The situations and actions which represent spiritual well-being are revealed in relationships (with strangers, others, nature and self), and in time (past, present and future). In addition, this study of the spiritual theme of the elderly and its related issues suggest that a sense of sufficiency and answers to universal meaning were part of the spiritual well-being of the elderly. Their spiritual well-being can be understood in their relationships to persons in their search for meaning, such as strangers, others, nature and self and in the situation of those who, throughout their lives, affirm their own lives as having a transcendent existence. This concept gives meaning to life even in its weakness and affirms this life to be an existence with value, including the special human characteristic of living thus paradoxically.

This researcher defines "spiritual well-being" as the aspect of human life that affirms a person's own existence by receiving meaning even in human weakness throughout one's lifetime from a union with a greater existence than self, others or "I." The observations and structured analysis of this paper in pursuit of understanding the elderly who possess spiritual well-being may prove useful in the development of assessments used in understanding the elderly in their daily life.

Correspondence to : Nobuo OKAMOTO

Department of Social Work
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail : nobuo@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.23, No.1, 2013 37－48)